

不純化と多様化

—— 山口重克による批判に答えて ——

小幡 道昭

2012年5月16日

目次

1	崩壊と没落	1
2	資本主義の部分性	3
3	「没落期」と「過渡期」	4
4	典型と類型	5
5	起源の二重性	7
6	解釈と批判	9

はじめに

今日のグローバリズムを直視すれば、宇野が描いた資本主義の生成、発展、没落という発展段階論の枠組みの再構成は必須であり、そのためにはさらにその基礎をなす原理論そのものの再構築も不可避である。これが前章の主旨であるが、これに対して、山口重克氏はその前半部分（「はじめに」と「段階論的批判」）に関して、「小幡道昭の宇野理論批判」（山口 [2010]）と題した批評論文を発表した。その内容は、宇野に対する「牽強附会の誤解釈」と勝手な「新方法論」を矯めんとする手厳しいものだが、私には残念ながら、山口氏の側に第2部の範囲を踏みだし新たな見解を展開する意志はもうないように見える。そこでここでは重複再論を避け、何がこれほどまでに深い隔たりを生むのか、両者の考え方の違いを第三者的に解説してみる。そのうえで最後に、山口氏が多用する「誤読」「誤解釈」という批判のしかたについて私見を添えておきたい。

1 崩壊と没落

山口氏による批判は、次のような「誤読」の指摘をもってはじまる。

「宇野は…もし資本主義に限界があるとすれば、現実の資本主義が純粋な姿をとりえなくなるからだと主張

した」というのは小幡の誤読である。そして、小幡が今日の資本主義は宇野批判が必要な歴史的現実と直面しているとみることには、この誤読による宇野理解が一つの原因になっているとみてよいだろう。（山口 [2010] 146 頁）

「誤読」というからには、筆者は単純に、何かしら対象になるテキストがあり、それを読み間違えたという意味だろうと思ったが、山口氏はそれがなにかを示していない。因みに、小幡に宇野がこう主張したという典拠はあるのかと尋ねたところ、「それは探せばいくらかでもでてくと思うが、たとえば次のような宇野の述懐など、これにあたらぬか」とのことだった。

諸外国がおくれて資本主義化して来たときには、イギリスをも含めて、資本主義はもはや自由主義イギリスに見られたような、資本主義的関係の拡充を純粋の資本主義社会実現の方向に進めるものとはいえなくなって来たのでした。僕は、この点こそ資本主義が一社会体制としての歴史的限度を与えられていることを示すものと思っています。（宇野 [1958] 223-4 頁）

細かいことといえば、一方は社会体制としての歴史的「限度」、他方は資本主義の「限界」で、多少意味がズレるかもしれない。また、「純粋の資本主義社会実現の方向に進めるものとはいえなくなって来た」から「歴史的限度を与えられている」というのと、「資本主義に限界があるとすれば、現実の資本主義が純粋な姿をとりえなくなるか

らだ」というのでは、論理的な違いが生じるかもしれない。しかし、それでも「誤読」と片づけるのは無茶であろう。

ただ山口氏があえて「誤読」と難詰せざるをえなかったのには、もう少し深いわけがありそうである。それは、山口氏が次のように、「限界」を「没落」と解釈し、さらにこの「没落」を「崩壊」と同義にみているためではないかと思われる。

小幡はこのマルクスと宇野の対比を、別の論考では、たとえば、「純粋化の傾向が純化・逆転した資本主義の歴史的発展段階の出現は、資本主義が没落期に達したことを意味すると主張した。純粋化=崩壊論に対する不純化=没落論である」(小幡①一頁)というようにもいっている。マルクスにはいろいろな側面があって、その解釈は簡単ではないが、自動崩壊論的な側面がある点でいえば、マルクスは純粋化=崩壊論であるといつてもよいかも知れない。しかし、自動崩壊論者でない宇野にとっては不純化は資本主義の限界ないし没落を意味するものではない。資本主義の没落は、宇野によれば資本主義世界の構成員の主体的な行動如何によって生じるものである。ここでは詳論しないが、この問題については「必然性」についての宇野の三類型論も参考にするとよいだろう。資本主義はいままでその不純化=多様化ゆえに、あるいは不純化=多様化にもかかわらず、延命している。その意味ではあえて定式化していえば、宇野説は不純化=延命論であろう。

(山口 [2010] 146 頁)

要するに、不純化とは多様化のことであり、それゆえ「不純化=没落論」ではなくて「宇野説は不純化=延命論」なのだという。この場合、「不純化=多様化」は「延命」にとって必要な条件なのか、阻害要因なのか、「不純化=多様化ゆえに」と「不純化=多様化にもかかわらず」では逆の意味になる。どっちにとっても似た結果になるものを「あるいは」で結ぶのは自然言語による認識の深化に欠かせないところがあり、類推はときに意想外の地平を切り拓く意味をもつ。しかし、反対のものを「あるいは」で結ぶのは、遅疑の挙げ句に碁石を交点の間におくようなもの、ここは両義性を排した命題をピシャリと打ちたて、真偽あるいは適否をはっきりさせるべきところであろう。この命題化について、小幡にはもっと言いたいことがあるそうだが、それは本稿の終わりにまわそう。

ポイントは山口氏の「不純化=多様化」という一手にある。この「不純化=多様化」というのは宇野の解釈なのか、それとも山口氏の自説なのか、筆者は「不純化=多様化」という表現を宇野のテキストのうちに思いうかべることができない。その典拠は山口氏に直に尋ねるほかないが、ただ小幡の「不純化=没落論」ときけば、次の類の記述がいくらかでも頭に浮かぶ。

十九世紀七十年代以後の資本主義の発展の示して

いるように、後れて資本主義化したドイツがむしろ新しい発展を、しかも従来の資本主義純化の傾向を必ずしも一面的には推進しないで実現することになると、資本主義の発展段階は、いわゆる発生、発展、没落の各時期を画するものであることを明らかにしてくるのであって、原理論的研究の純化に対して、明確に段階論的解明を区別することが要請される。現に、資本主義の崩壊をとく『資本論』でさえ、その崩壊の規定を経済学的に与えているわけではない。原理論はかかる規定を与えないのが当然なのである。段階論も直ちに崩壊の必然性を明らかにするわけではないが、資本主義の発生、発展に対して没落期を明らかにすることはできる。

(宇野弘蔵 [1966] 61 頁)

「没落」を「崩壊」と区別し、資本主義の「崩壊」は経済学的に与えられるものではないが、資本主義の発生、発展に対する「没落」なら段階論で明らかにできるといっている文章であろう。『資本論』を単純に「純粋化=崩壊論」と圧縮することに宇野が異を唱えていたのはたしかだが、「崩壊」というのを何もしないで壊れるという「自動崩壊」に狭めず、その発展の結果としてそれに敵対する「主体的な行動」が内部から生みだされるという「自己崩壊」の意味に広げてとれば、『資本論』を「純粋化=崩壊論」とよぶことに山口氏もいちおう同意する。こうした意味も含め、『資本論』は一般に、生産の社会的性格と所有の私的性格の対立という資本主義の「基本矛盾」が、資本の蓄積と生産諸力の上昇のもとで極限にまで累積すると読まれてきた。これに対して宇野は、労働力の商品化こそ「基本矛盾」というのに相応しい内容であり、この矛盾なら純粋な資本主義は、周期的な景気循環を通じてではあるが、その内部で解決できるというテーゼを対置した。小幡が宇野のこのテーゼを理論的に正しいと考えているとは思えないが、ここではただ、宇野が晩年難解と疎んじられることを嫌って自説を通俗化させた便法と大人しくとり、そのうえで宇野の立場を『資本論』の「純粋化=崩壊論に対する不純化=没落論」だと圧縮して要約したまでのことであろう。

いずれにせよ、宇野の場合、「没落」と「崩壊」とは別のことであり、「没落期」という表現が帝国主義段階に対して多用されたことはたしかである。「没落」は「発生、発展」の対概念（「発生」と「発展」の概念を分離することは難しいが）であり、成長が終われば、没落ははじまる。それでも死ぬまでは生きているという意味でいえば、生きていること自体「延命」には違いはないが、ただそれをもって「没落期」ではなくて「延命期」なのだという山口氏の主張は、解説者なかせの難解な一手、まさか「不純化=没落論」を「不純化=崩壊論」と読み間違えたということはないと思うが、万が一そうなら「誤読」というのにビックリのケース、「没落」というたった二文字の表記には「誤読」の危険がつきまとう。宇野も「没落」が文字どおり資本主義の「死滅」とられるのを恐れて、た

たとえば「資本主義はまさに没落をひかえた爛熟期に入った」（宇野弘蔵 [1971] 154 頁）と「爛熟」の語を宛てることも多かった。matured の意味であろう。山口氏がこれをもって、だから資本主義は老いて益々盛んとなるのであり、没落というのは不適だったのだ、といえ、小幡も「マルクスの場合、なお資本主義がその末期的現象を呈するということが明らかにされえなかった」（宇野 [1971] 55 頁）という如く、やはり「末期的現象」なのだ、という応じるといった具合、このあたり、両者案外、棋風が似ているようで、付き合っていると切りがない。

宇野が言った言わぬは二人で気が済むまでやってみようとして、ここは傍目八目、「不純化=没落論」そのものに関しては、山口氏も小幡と同様、棄却されなければならぬ、という結論になりそうである。言っていないのだから棄却も何もない、といえ、それまでだが、両者の違いは、純化に対する鈍化・逆転という不純化の「傾向」を重視する小幡に対して、山口氏が不純化を多様化と捉え、現実の資本主義はつねに不純で多様だというように、空間的な差異を強調するところにある。真の問題はこの違いが、このテーゼを棄却する根拠にどう関わってくるのかという点にある。

2 資本主義の部分性

まず、小幡の棄却理由のほうから確かめておこう。現局面までを射程に入れた場合、「不純化=没落論」では捉えることのできない世界が現れているという意味である。それは「資本主義の限界」ないし「限度」といわれている中味の問題にある。帝国主義段階の核心を一言でいえば、非市場的な要因の果たす役割の増大ということになる。それは、資本主義国内部における独占の支配や農業部門での小農中農の温存、等々と同時に、対外的には植民地体制の再編強化、周辺地域の産業的発展を犠牲にした資本主義諸国の部分的な発展という二重の現象となって現れる。宇野の不純化は、19 世紀末から第一次世界大戦に至るいわゆる古典的帝国主義の時代を念頭においたものであったが、非市場的要因への依存、資本主義の部分性という基調は、戦間期をへて第二次世界大戦後にいたるまで、先進資本主義諸国における福祉国家の形成、第三世界における「低開発の開発」等々と、現象形態は変わっても持続したとみなしうる。このような段階論の拡張は一般になされてきたことであり、こうした長期の帝国主義段階を規定するには、むしろ米ソの冷戦体制を重視すべきだという主張もそれほど特異なものとはいえない。小幡の主張は、このような帝国主義段階の拡張を受け容れたとしてもなお、20 世紀末に顕在化した新たな資本主義諸国の台頭は、生成・発展・没落という三段階論の枠組みに収まらないと点にある。これに対して、山口氏は次のように疑問を提示する。

「三段階論が予期しなかった新興経済圏の台頭」といっているのは、冷戦期の資本主義を没落期とみ

ていた宇野段階論では新しい資本主義の台頭は予期できなかった事態だったということなのだろう。しかし、前述したように、また後述するように、宇野の「没落期説」ないし「過渡期説」は誤解釈であるし、また、ここで「資本主義の全世界化」という楽天的な信仰の論拠として小幡があげている「新興経済圏の台頭」がはたして「全世界がすべて資本主義になる」ことを保障する事態なのだろうかという点にも疑問が残る。

（山口 [2010] 151-2 頁）

ここでもまた「誤解釈」で話の腰が折られてしまうが、ただ、このうち「没落期説」についてはすでに解説したので、もう一つ、山口氏の強調して止まない「過渡期説」=誤解釈論のほうはあとでゆっくり拝聴することとし、まず小幡の「新興経済圏の台頭」の意味について確かめよう。ここで山口氏はわざわざ括弧を付して「資本主義の全世界化」「全世界がすべて資本主義になる」と記しているが、筆者は小幡の論考のうちにこの文言の有無を審らかなしえなかった。たしかに、拡張された「インペリアルイズム」の概念では捉えられない 20 世紀末以降の現実に「グローバリズム」というラベルを貼っていることはたしかだが、これをもし上記のようにとったとすれば、的を逸した読み方になろう。たしかに、アメリカをスタンダードとした市場原理が全世界を席捲していると捉える「グローバリズム=アメリカナイゼーション論」なら「資本主義の全世界化」とよぶに値するかもしれない。しかし、小幡はこれに反対し、グローバリズムの底流をなすのは、今まで低開発を強いられてきた諸国・地域のなかに勃発した新たな資本主義化の動きだとみる「グローバリズム=新興経済圏基底論」を主張している。だから「新興経済圏の台頭」というのも、帝国主義段階を画した 19 世紀末の後発資本主義諸国= 20 世紀の先進資本主義諸国のもとで直接・間接に発展を阻害されてきた関係を突き破る新たな「うねり」を含意しているとみてよい。単純に 19 世紀末と 20 世紀末が重なるというわけではなさそうだが、いずれも「新たな台頭」であり「全世界化」ではない。こうした「新興経済圏の台頭」を直視すれば、資本主義内部の非市場的要因に依拠した発展が、同時に周辺部分の資本主義化を抑制してきたという帝国主義段階の一般的傾向を見直さざるをえないというのが小幡の言いたいことなのだろう。しかし、資本主義の共時的な多様性に関心をむける山口氏には、歴史的な「傾向」を重視し、そのために資本主義の変容を原理的に捉えなおそうという小幡の意図はなかなか理解できないようで、次のような見当外れな付度に終わる。

従来の資本主義世界の内外で資本主義がいわば逆流しているこの現況が、おそらく小幡の言いたい「帝国主義的現象を越えた新たな状況」、「三段階論が予期しなかった新興経済圏の台頭という状況」であり、これを説明するためには「段階論の見直し」「問い直し」が必要であると言いたいのであろう。

(山口 [2010] 151 頁)

ところが、「純粋資本主義」論から離脱した小幡には、「逆流」しようにも、もう戻る先はない。「逆流する資本主義」は伊藤誠氏がかねて持論とするところ(伊藤 [1990])、「原理論をこのような意味で基礎にしている帝国主義段階論が仮に破綻しているとしても、つまり不純化が再逆転して純化が再進行しているとしても、だから原理論の見直しが必要になるというのは、私には全く理解できない理屈である。」(山口 [2010] 158 頁)ときいて、小幡は一瞬キョトンとしていた。「再逆転」なら現実がまた純粋資本主義の原理像に近づくわけだから、もちろん「原理論の見直し」など必要なのは当然、だから伊藤氏も山口氏に頷き「なにもそこまでぜずとも……」と嗜めにかかる。筆者としてはむしろ、この際ぜひ山口氏による逆流仮説批判を期待したい。というわけで、「資本主義の部分性」に関するかぎり、両者の議論はかみ合いそうにないが、単純な「誤解釈」と片づけられている、宇野の「過渡期説」については、小幡も多少いっておきたいことがあるようである。

3 「没落期」と「過渡期」

問題は宇野が 1971 年に刊行した『経済政策論 改訂版』の最後に付した 5 頁ほどのごく短い「補記 — 第 1 次世界大戦後の資本主義の発展について」に関わる。今ではもう昔語りになってしまったが、小幡の世代には「過渡期」論は独自のリアリティをもつ問題だった。それは、第三世界における民族解放運動が社会主義と結びつき、ベトナム戦争をはじめ、中南米でもまたアラブ諸国でも反米闘争が群発し、先進諸国においても反戦運動が高揚し資本主義そのものの打倒を謳う反体制運動が現れた熱い時代だった。一国社会主義論による既成左翼の二段階革命戦略と真っ向から対立し、新左翼の内部では先進諸国の革命運動と第三世界の民族解放闘争をバラバラにみて判断するのはナンセンスで、世界を全体として捉えれば、現代はまさに社会主義への過渡期世界であり、先進国の革命も後進国の革命も一体となって世界同時革命を構成する、といった主張があちこちで叫ばれていた。こうしたなかで、正統派のマルクス経済学から異端視されてきた宇野の発展段階論に関心が集まる折から、次のようなインタビュー記事がある雑誌に現れた。

編集部 こんど先生は『経済政策論』の改訂版をお出しになったわけですが、新しく補記を加えられ、その補記の中で、第一次大戦以降の「資本主義の発展が段階的規定をなすのに如何なる程度まで役立てられるかは、極めて興味ある、重要な問題であるが疑問として残しておきたい」という註をはずし、「むしろ現状分析としての世界経済論の課題をなす」とされていますが、いままで断定をためらっておられた理由はどういうことですか。

宇野 その理由というのは、現在の植民地解放と、

それから社会主義国が沢山できて、それが資本主義国と戦争するというにまでなってきたという事実によるのです。ここまでくれば、これはもう資本主流の時代だといえないじゃないか、つまり段階論として区別しなければならぬような問題じゃないんじゃないかということです。

編集部 そのところをもう少し説明して下さい。

宇野 段階論ではないということだよ。つまり、過渡期に段階があるかな。たとえば、海のかなたでは資本主義で、こっち側は、まだ中世期だというときに、どっちの段階論をやるのかということだ。イギリスの資本主義の初期を段階論としてとるか、それともフランスの封建社会を段階論としてとるべきか、僕はフランスはいらんと思う。フランスをやった重商主義論は大抵失敗ですよ。どうしてかということ、直接にはその重商主義から資本主義はでてこないのだ。むしろイギリスから教えられて資本主義化したわけです。

(宇野 [1971] 14-15 頁) (なお同じ頃に刊行された宇野 [1972] 221-26 頁でも「過渡期」という表現はないが、「海のかなたでは」という類の話を披露している。)

これを読んで「宇野も過渡期だといっているぞ」と我が意を得たりと吹聴する学友諸君に、「なにも宇野がいったからといって過渡期になるわけじゃあるまいし…」と、マルクス主義に根深く蔓延る権威主義に早くもシラけた、と小幡は洩らしていたが、二十にしてそこまで達観していたか、それはちょっと怪しい。ただ、このような発言を聞いて育った小幡の世代に「宇野は「ロシア革命後=社会主義への過渡期」論を主張したというよく流布されている宇野批判があるが、これも同類の誤読によるものである。」(山口 [2010] 146 頁)といまさら論してみても詮無いこと、40 年遅い。「小幡はこの解釈を採用している(小幡②八四頁右)ので、不純化=没落論とみるのはこの解釈によるのかも知れないが、これも宇野の段階論の無効性を言い立てるための仕掛けとしての為にする誤解釈であるといつてよい。」(山口 [2010] 146 頁)「第一次大戦後=社会主義への過渡期」論と見ていることと関連するのであろうが、そこでも述べたように、これは小幡のいわば為にする誤解釈である。」と繰り返す山口氏に、40 年たってこんどは「言っていない」ですか、これには正直シラけましたね…と小幡は苦笑していた。

「補記」は「要するに、第二次大戦後の資本主義の発展は新たな発展段階を画するものとはいえないということである」と山口氏はいう。小幡もそう考えているようで、「帝国主義で結構する既存の三段階をそのままにして、第四段階を継ぎ足そうというのはいかにも安易に過ぎる」と肯んじる。ところが、山口氏はこれに対して「第四段階論者は誰のことなのか明示されていないが、大内力の国家独占資本主義論が念頭にあるのかも知れない。しかし、宇野はこの国家独占資本主義論には否定的であったし、継ぎ足し論も考えてはいなかった」とトボケけてみ

せる。大内力の国家独占資本主義論については、小幡はかねてより、その後の福祉国家型資本主義と同様、あくまで帝国主義段階の拡張論だと述べてきたのであり、このインペリアルイズムにグローバリズムが第四段階として続くと安易に考えてはならないと述べていることは明らかであろう。それはともかく「世界史的には社会主義への過渡期に入った」という小幡の「補記」解釈は、「第二次大戦後の資本主義の発展は新たな発展段階を画するものとはいえない」という山口氏の解釈と矛盾するものではない。「海のかなたでは社会主義で、こっち側は、まだ資本主義だ」という意味で、世界史的には「過渡期に入った」だけで、資本主義自体に過渡期の段階があるといっているわけではない。山口氏は「社会主義と対立する資本主義」の「発展」というのが、どうして「社会主義に移行する過渡期の資本主義」と読めるのであろうかと訝しがるが、小幡のどこをどう読めば「過渡期の資本主義」といっていることになるのか、残念ながら筆者にはわからない。

こうして「誤読」「誤解釈」を連発した挙げ句に「実は小幡自身がかつて過渡期説に迷い込んでいたのを、宇野のこのようにいって宇野をおとしめることによってアリバイ作りをしようとしているのかも知れないと思われる」（山口 [2010] 159 頁）というのはいかに小幡に気の毒な話、軽佻浮薄といえども狡猾奸佞には非ず、純粹に不純なるのみ、江戸っ子は早月の鯉の吹き流し口先ばかりで腹は無しとかや、宇野に託^{かこ}ってアリバイ工作か、などという猜疑に値する輩にはとてもみえない。いずれにせよ、だれも 40 年前には社会主義の瓦解や新興経済圏の台頭を論じてこなかったのだから、そのとき世界がどのように現前していたのかを、明確な言葉でテーゼ化してみる必要はある。山口氏を諫めるつもりは毛頭ないが、「ソ連邦は資本主義に対抗して、資本主義とは異なるかたちで産業的発展を指向する第三世界の先端部という性格」をもち、この先端部が二段階革命戦略によって第三世界を事実上従属させ、自立的発展を押しえ込んできたのだと小幡が一手打ち込んでいる以上、ここは山口氏の目に 20 世紀の社会主義がどうみえていたのか、応手を期待したいところである。

4 典型と類型

山口氏が自らの段階論を類型論と称したときから、小幡は典型と類型の区別の要ありと訴えていたようであるが、今回もどうやら空振りだったようである。

このような新たな「世界」のことを小幡は、「ドイツ＝典型説の再現には還元できない世界」（同上）と述べている。ここでも宇野段階論の無効性をいいたいようであるが、「ドイツ＝典型説」ということで何が言いたいのかよく分からない。宇野の段階論にはいくつかの側面があるが、「ドイツ＝典型説」というレッテルに何か意味があるとすれば、次

のようなことであろう。すなわち、一つは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのいわゆる帝国主義段階における支配的な蓄積様式が金融資本的蓄積であり、金融資本の展開はドイツ、イギリス、アメリカに見られたが、それが典型的に展開されたのがドイツ資本主義においてであったというのが「ドイツ＝典型説」なるものの一つの意味であろう。現在は二一世紀であるから、当時のドイツ資本主義が再現されえないのは当たり前の話であるが、当時のドイツの特徴を捨象したような一般的な金融資本的蓄積様式の理論を現代の資本主義の理解に適用できないかどうかという問題は考えてみても良い問題であろう。（山口 [2010] 156-7 頁）

このあと「ドイツを最も積極的な基軸国として世界が編成されていた」という「もう一つの側面」が補足されているが、基本は以上の箇所をみれば充分で、山口氏は「何が言いたいかよく分からない」といった後で、すぐに「典型的に展開されたのがドイツ資本主義においてであった」と解釈しているとおりで、ちゃんとわかっているのではないですか、と小幡はいついた。ただ、二人のわかり方は、筆者からみるとやはりちょっとズレており、山口氏は小幡の「ドイツ＝典型説」について「遅れて資本主義化したドイツは、… 非商品経済的な関係を取り込んで独自の発展を遂げる。それは爛熟期の資本主義の典型をな」（同上、右）すという説だと、「先行するイギリスと同じ道を早足で歩んでキャッチ・アップするのではなく」の部分をおぼろげに「…」で省略して紹介する。これが小幡には不満なようで、それでは「典型」の意味がわからなくなるのも無理ない、と嘆いていた。各国をフラットに並べて、空間的な多様性を問題にする山口氏は、「典型」という考え方にもともと関心がないようで、たとえば「宇野は金融資本の諸相としてドイツ金融資本、イギリス金融資本、アメリカ金融資本の三類型を取り出したが、これは同時に、当時の世界経済編成の基軸の多極化の様相を示すものとして解説できるものであった。」とさりさりという。小幡はこれを読んで、次の説明とどうも符合しない、宇野という人はもう一人いるのか、と真剣に悩んでいた。

帝国主義は、資本主義の初期の重商主義のように、イギリスとかドイツとかの一国をとって、その典型を説くというわけにはゆきません。ドイツ、イギリス、アメリカ等の諸国が取り上げられなければなりません。僕自身は、一方にドイツをとり、他方にイギリスをとるという方法をとっていますが、そしてアメリカはなお第一次世界大戦までは典型的なものとしてでなく、単に補足的に採り上げられるにすぎないものとして扱ったのですが、それはもちろんドイツ、イギリスの両者に共通な金融資本化の傾向は認めながら、その相違を明らかにすることによって、始めて金融資本の意味も明確にされ、金融資本的「独占」も解明されると考え

たからです。… もっともこういう風にドイツとイギリスとにその金融資本の相違が認められるにしても、いずれが典型的であるかということには、なお問題がないわけではありません。僕自身としては、ドイツの場合にはその金融資本が国内の生産過程に直接的に基いて形成せられた点に、その基本的規定を与えられるものとしたのですが、それは金融資本を単なるレントナーの資本にするのは、余りに一面的であると考えたからです。(宇野 [1958] 204-5 頁)

小幡としては、山口氏のいうようにただ「三類型を取り出した」というのではなく、宇野は「ドイツとイギリスとにその金融資本の相違が認められるにしても、いずれが典型的であるか」を問題にしているのだ、といたいのであろう。ただ、前半では帝国主義段階では「一国をとって、その典型を説くというわけにはゆきません」というのだから、典型が一つにならないということで、それはつまり、事実上「類型」しかない、といているのだ、という解釈も成り立つ。しかし、この「一国をとって」の意味は、自由主義段階ではイギリス「一国をとって」説けばすむのに対して、帝国主義段階となると複数の国をとりあげなければならなくなるが、それでもただ並置するのではなくそのなかで「典型」となるタイプを説かなくてはならない、という意味ともとれる。資本主義の段階的発展と変容に関心を寄せる小幡にとっては、歴史的な時間の流れのなかで生じる「典型」の交替が重要な意味をもつのであろう。とはいえ、ここには宇野の「典型」という用語の多義性が露呈しているのであり、解釈は所詮このあたりで分かれるもの、筆者としては、このさきは多義性を排した命題に定式化し、その真偽あるいは適否を両者それぞれ吟味してほしいと願うばかりである。

小幡は当然のことと筆者の提案に首肯しているが、山口氏がそれでもなお「宇野段階論の無効性をいいたいようである」と怪しむのであれば、たとえば、つぎの宇野のテキストをどのように解説するのか、たずねてみたい。

段階の意義といえば大体そういうことになると思うが、問題は段階論の方法にあると思う。たとえば『帝国主義論』というのが特定の国の特定の経済的事実をとってやれるかどうか、それとも多くの国をとってその中に類型的なものを規定すべきか、その点が問題になる。ぼくは従来それをたびたび類型的なものとしてきたが、どうも類型というのはよろしくないんじゃないかと、最近はそのように思っている。むしろ典型といった方がいいんじゃないか。事実、ぼくは代表的な国をとって、しかもそのうちの代表的な産業、代表的な政策をとって規定してきている。類型といったために、いろいろな国の帝国主義的傾向をつかまえて、その中から抽象すればいいのではないかと、こういうふうに考えられるが、そうはいえないのではないか。重商主義や自由主義になると、誰でもイギ

リスを代表にするということに異存はないが、帝国主義になると、その点はちょっとむずかしい。そこにこの段階論的な規定の性格の問題がある。どうも典型といった方がいいんじゃないかと思う。もっとも帝国主義には二つの面があつて、ドイツとイギリスをとるということになるが、それにしても研究の範囲は不明瞭で、何によって典型とするかという問題は残されている。(宇野 [1967] 108-9 頁)

山口氏が「現在は二世紀であるから、当時のドイツ資本主義が再現されえないのは当たり前のお話であるが」というのは、もともとドイツそのものではなく、そこに現れる「典型」を問題にしているのだから、これは笑えぬ冗句として、これに続く「当時のドイツの特徴を捨象したような一般的な金融資本的蓄積様式の理論を現代の資本主義の理解に適用できないかどうかという問題は考えてみても良い問題であろう」というのは、「類型といったために、いろいろな国の帝国主義的傾向をつかまえて、その中から抽象すればいいのではないかと、こういうふうに考えられる」という宇野が避けようとしたアプローチと自説として唱えているようにみえる。筆者はべつに、宇野と違うから良い悪いのといいたいのではない。ただ、この宇野のテキストを明確に定式化し、できれば宇野の「典型」論に残る多義性を分析し、山口氏独自の「類型」論の意義を積極的に論じてほしいだけである。「宇野批判」は山口氏の「類型」論のも避けて通れないところなのではないかと思うのである。

なお、「ドイツ＝典型」説批判に関しては、商人資本、産業資本、金融資本という各段階に支配的な資本によって、三段階に区切るというシェーマもあわせて再考してみる必要がある。山口氏はこのシェーマにしたがえば、「金融資本的蓄積様式以外の何か新しい蓄積様式が規定できるとはいえないのではないかとという意味で、第一次大戦後の資本主義は段階論の新たな対象にはならない」と例の「補記」を解釈し、「一九世紀末から現代までの資本主義は金融資本的蓄積様式が支配的な段階という意味で、金融資本段階と名付ける」という自説を提示している。小幡はそもそもこのシェーマ自体を疑っているようであり、このあたりも両者の議論がかみあわない原因になっているようにみえる。何か少し変わったことをいうと、このシェーマを振りかざす先達に押さえつけられてきた小幡の世代が、これをドグマ以外の何者にも非ずと厭^{ひそか}気持ちもわからぬことはない。小幡はかつて次のように私に不満を洩らしていた。

“金融資本的蓄積様式というのは後だしジャンケンのようなものだ。何がでてきても、すべてこれで片がつく。非「産業資本」という一種の補集合のようなもので、「産業資本」を原理的に狭く規定しておけば、後から登場したのものにはみんな「金融資本」というラベルを貼ることができる、そして、それは新しい段階を画するものではない、と結論する。原理的に説けない資本だ、だからそれはいろいろなタイプがあつてよいのだ、何がでてきて

も、ヘッチャラだ、黒でも白でもみんな灰色の一種だ、というのでは話にならない。”

小幡は例によって少しメーターが上がりぎみだが、たしかに宇野の場合、どれが典型か、複数あるといっても、ともかく「積極的」「進取的」なドイツ型と、「消極的」「防衛的」なイギリス型という白黒両極に分けて、この二つの「典型」を用いて現実の灰色を分析しようとする面があった。これに対して、「当時のドイツの特徴を捨象したような一般的な金融資本的蓄積様式の理論」を指向する山口氏のアプローチでは、どんな資本がでてきようと「一般的な金融資本的蓄積様式」の一種に括られ、あとは平面的類型化で相対化されることになる。一長一短といえばそれまでだが、典型・類型をめぐる地取りは、今後の見所としておこう。

5 起源の二重性

最後に、小幡が「三段階論の射程に取まらない世界に対して、原理論はどのように再構築されるべきか、変容論的アプローチの可能性を模索してみる」と宣言した「起源の二重性」についてみておこう。山口氏は小幡の説明を、『資本論』における「資本主義の起源」には「(一) 商業革命をベースとした規定と (二) 産業革命をベースとした規定との二重の記述がある」といつているのだと紹介した後、山口氏は残念ながらまたもやその「誤解釈」を咎めることから着手する。

便宜上、(一) を流通主義、(二) を生産主義と名付けることにしよう。小幡は、このようにマルクスないし宇野理論をあえて生産主義だと決めつけることによって、この両者には今日のグローバリズムを捉えきれない限界があることをいい立てたいようであるが、しかし、マルクスについても宇野についても、その資本主義像は「第二の起源がその根本をなしている」というのは批判のための仕掛け的な為にする誤解釈である。

...

また、そもそも流通主義と生産主義を二律背反的、二者択一的な起源論だとみて裁断を下すのはこれまた為にする短絡的な議論であるといえよう。両者は一体となって相互補完的に起源をなすと見てい [た] のがマルクスないし宇野の起源論である。

(山口 [2010] 148-9 頁)

もともと「起源の二重性」を説いているのに、「マルクスないし宇野理論をあえて生産主義だと決めつける」と逆に決めつけられたのでは、小幡も応手に窮することだろう。「そもそも流通主義と生産主義を二律背反的、二者択一的な起源論だとみて裁断を下すのはこれまた為にする短絡的な議論である」というのは、自ら黒の地に黒石をおくようなもの、「二律背反的」なものの「二重性」というのは、得意の超論理学をもってしてもわからない、と頭を抱えていた。小幡の主張は、普通の論理学にしたがっ

て、(1) 歴史的な起源論と (2) 原理的な資本主義像を区別して、(2) のレベルで、いずれが「根本」をなすかを論じているだけであろう。山口氏のように「両者は一体となって相互補完的に起源をなす」と穏当にいつておけば、実証的な研究者たちから原論研究者が煙たがられることはない。(1) のレベルで言えば、併存する以上、何らかの関係はあるものだし、「補完」はたいてい「相互的」なものにきまっている。しかし、(2) のレベルで、原理像を構成しようとする「相互補完的」ではすまない。どちらが「根本」をなすのかがつねに問われる。商業資本と銀行資本は現実には「相互補完的」だろうが、そのうちどちらを先に説くべきか、こうした思考法を若い頃から口喧しく駈けられてきた小幡のような原論研究者にとって、「両者は一体となって相互補完的」といつてすませるのは、あくまで実証の世界での話、それだけではどうにも気がすまないだろう。

(1) の歴史的な分析に関して小幡は、そしておそらく山口もまた、門外漢であり、ただ見えるままを直截に語っているだけで、新たな事実の発見を主張しているわけではない。グローバリズムの底流をなす、中国やインドなどの新興経済圏をみると、そこには 19 世紀のヨーロッパの、そして日本のインペリアルイズムによって暴力的に破壊されるまで、古くから商品経済的發展が進んでいたことを重視し、グローバリズムにこうした商業圏の復活の一面をみようとしている小幡に対して、山口氏はそれは「ドイツとかアメリカといった後発国が先進国イギリスに追いつき、追い越した歴史」の「中国やインドによる再現」にすぎず、なにも変わってはいないと解釈しているにすぎない。山口氏のように一般化すればそうもいえるし、小幡のようにいいたければそういう理解もありうるという程度の話にすぎない。宛ら、東の空を仰いで夜が明けたといっている者に、西の空を指さしてまだ夜だといっているの図、思い込みの強い原論研究者が歴史を語る時陥るバランス感覚の欠如がよく示されているよう参考になる。小幡は、「重商主義段階」から「自由主義段階」を通じイギリスで「生成」「発展」した資本主義が、「帝国主義段階」において後発諸国に「輸出」されたとみる「単一起源説」を批判し、独自の「多重起源説」を提唱してきたのであるが、ここで「古い商圏の復活」にまで論及しているのは、さらにこれを「多地域起源説」に拡充しようという意図があつてのことかもしれない。ホモ・サピエンスの起源については、アフリカ単一起源説と多(地域)起源説の間で論争があり、現在のところ単一起源説に軍配が上がったと聞いているが、資本主義の起源に関してははたしてどうなるのか。山口氏は懸命に灰汁をすくって宇野流のお澄ましに仕立てたいようだが、こうした不純な関心からされる小幡が相手ではとつてもとつても切りがないだろう。

さてこのように、小幡は「宇野自身の資本主義像では第二の起源がその根本をなしている」と原理論レベルで論じているわけであるが、この内容に対しても山口氏は次のような異なった解釈を提示する。

宇野理論が生成当時から主流派から流通主義と呼ばれたことからある程度推測できるかと思うが、宇野は、マルクス同様、十六世紀から十八世紀にかけての商人資本の活動による世界市場の展開がイギリスに世界貿易の生産拠点を確立したことによって、イギリスを中心とした資本主義世界が生成したという歴史認識を持っていた。ヨーロッパの中で封建制が比較的脆弱であったイギリスに流通関係が浸透して行ったことによって、労働力の商品化が促進されたとみたわけである。このような資本主義の起源における流通の役割の重視を宇野の流通浸透視点と表現した人もいた。この資本主義認識は、理論体系の問題としては、原理論において流通論を生産論から独立させた点に現れている。

(山口 [2010] 149 頁)

ここで「流通主義と呼ばれたことからある程度推測できる」といい、「宇野の流通浸透視点と表現した人もいた」というのは、そうだと肯定してるのか、それともそういわれているだけで、これも正確に言えば誤りだといいたいのか、明言を回避したこの種のテキストについて何かいうと、また「誤解釈」の連発を食らうだけだからの前半は無視したいと小幡はいついた。このあたり、(1)の歴史的起源と(2)原理論が必ずしも区別されずに論じられているようにみえるが、後半は(2)に踏みこんだ説明になっている。そのうえで小幡としては、「イギリスに流通関係が浸透して行ったことによって、労働力の商品化が促進された」という「資本主義認識は、理論体系の問題としては、原理論において流通論を生産論から独立させた点に現れている」というのが山口氏の宇野解釈ととるほかあるまいという。だが、このような山口氏の解釈は、どうも小幡が読んできた次のような宇野のテキストに符合しないという。

資本の産業資本的形式は、商人資本的形式や金貨資本的形式と異なって、資本形態がいわばそれ自身で展開するものとはいえない。この形式のいわば基軸をなす労働力の商品化は流通形態自身から出るものではないからである。勿論、資本としてはこの形式を展開しなければ、生産過程を把握しうることにはならない、したがってまた資本主義社会を実現するというにもならない。しかし労働力の商品化の基礎をなす、生産手段を失った無産労働者の大規模的出現は、資本主義に先きだつ封建社会自身の崩壊によるものであって、いわゆる単純なる商品生産者としての小生産者が、商品経済によって分解されて生ずるというようなものではない。商品経済の発展は、殊に商人資本によって、また部分的には金貨資本によって、小生産者を分解し、その社会的関係を破壊する傾向を常にもっているのではあるが、しかしこの小生産者の分解は、どこでも、またいつでも近代的無産

労働者を出現せしめるとは限らない。現に、十六、七世紀以来の西欧諸国における商品経済の発展も、イギリスにおいて始めて資本主義を発生せしめることになったのである。

(宇野 [1964] 44-5 頁)

ここでのポイントは、商品経済の浸透作用は社会的関係を「破壊」するだけで、労働力の商品化を「促進」する力はない、という否定形の規定にあり、この背後には、資本主義は、商品経済外的なゲバルトによって土地と労働力が分離され、大量の無産労働者が出現することで成立したという肯定形の規定が隠されている、というのが小幡の解釈のようである。「流通論を生産論から独立させた」のは、「労働力の商品化は流通形態自身から出るものではない」ことを示すためであって、「流通浸透視点」が流通論を生産論から独立させた「理論体系」に反映されている、というのは逆だろうと小幡は山口氏の解釈に疑問を投げかける。これに対しておそらく山口氏なら、自分は「労働力の商品化が促進された」といつているだけで、「いわゆる資本の原始的蓄積」を第一巻の最後においたことを高く評価した宇野に倣い、「無産労働者の大規模的出現」はこのイギリスに特有な原始的蓄積によると理解しているのだ、と反論するだろう。とはいえ、ここも傍目八目、両者に容認されたテーゼは、“歴史過程としてみると、商品経済の浸透は、小生産者を分解し、労働力の商品化を「促進」しはするが、「無産労働者の大規模的出現」はそれとは別個の特殊歴史的な原始的蓄積の過程を通じて実現される。したがって、理論体系の問題としては、流通論では、産業資本の「形式」までしか説明できない。原理的には説明できない「労働力の商品化」を新たに導入して、生産論を独立させて説く必要がある。”という、ほぼ同様な内容になる。両者はまだ解釈の優劣を競いたいようだが、それは所詮一目の碁、もう少し大局につながる問題を解説しておこう。

山口氏は「生産主義的な起源論だということはマルクスないし宇野の批判にはならないのであるが、彼らが起源問題をどう考えていたかを別にして、小幡が生産主義では今日のグローバリズムは捉えきれないということによって何が言いたいのかを見ておこう」(山口 [2010] 150 頁)と留保した後、小幡が「市場自体は、さまざまな生産様式のうえに立ちながら、それ自体の固有の論理で独自の機構的發展を遂げ、商業機構や信用機構、さらには資本市場までも生み出す傾向を示す」といい、さらに「今日の新興経済圏はある意味では…古い商業社会の復活という性格を持つ」のであるから、

「商品経済そのものがもつ固有の組織性、商業、金融の機構的發展の独自性が、原理的にも解明される必要がある」という文章とあわせて読むならば、小幡が言いたいことは、今日の新興経済圏の台頭によっていわゆる流通論次元での、つまり生産論を前提しない次元での市場機構の解明の必要が提起されているということになりそうである。

(山口 [2010] 150 頁)

という。「マルクスないし宇野の批判」の話が絡むと、また解釈論議に戻りそうだが、その話を別にすれば、またもや両者の指し手は似通ってみえる。山口氏は、「私もいわゆる流通論次元で商業機構や金融機構をもう少し詳しく展開することは必要であるし、可能でもあると思っている」(山口 [2010] 150 頁)と譲歩しながら、それは「従来の原理論の内容を多少微調整すればすむ話で、この点に関しても従来の原理論の見直しが必要であるというほどの問題であるとは思えない」(山口 [2010] 151 頁)と反駁する。こういながら、「従来の原理論の見直し」を平然とやってのけてきた山口氏のこと、「微調整」かどうかは後で考えればよいこと、どう調整するのか、筆者としてはここでも鮮明かつ斬新な一手を期待するばかりである。

小幡のほうは若気の至りか、すでに多少着手したつもりのように、流通論を中心に、商業機構や金融機構などの機構論がこれにどう絡むか、原理論の問題として論じている。産業資本をベースに、商業信用、銀行信用という展開を通じて、兌換銀行券を説き、物品貨幣ないし金属貨幣の派生形態として、信用貨幣を説明するアプローチに対して、小幡は信用貨幣のルーツを貨幣そのものの生成の場に移し、価値形態論に遡って、金属貨幣と信用貨幣をこの抽象レベルで拮抗する存在と捉えようとしているようだが、これはかなり無理な手筋、「いい年してそんなところによじ登って、落ちて死んでも知りませんよ」と若者に冷やかされてきた小幡の転落の現場が拝めるかどうか。だ山口氏としては、捨て石を多用する小幡の手筋とみて深くは付き合えぬかもしれない。山口氏の関心は「流通論次元で商業機構や金融機構をもう少し詳しく展開すること」にあるようである。これまでの原理論では、個別産業資本を前提に、そこから分化したのとして商業資本や銀行資本が捉えてきた。これは、商業機構や金融機構が資本主義的な生産様式のもとではじめて本格的に発達するという展開になっているが、この点を山口氏がどう「微調整」するのか、妙手をまちたいところである。

さらに、小幡は資本の概念とその現象形態とを区別し、本来の資本概念に合致するのは個人資本家である、というテーゼにまで異論を挟む。資本概念を厳密に突き詰めてみれば、個人資本家にも結合資本にもともに瑕疵が残るという論法である。このようなかたちで資本の非人格性を説く論者は、従来からいるにはいたが、小幡のポイントは「自己増殖する価値の運動体」といった概念に照らして、個別資本家も結合資本もともに不完全だという点にある。小幡はそうではないというが、筆者には、宇野が理念としての資本に、現実の株式資本を対置したのに、半分逆戻りする論法になっているようにもみえる。このあたり、山口氏がどう批判するのか、これも見所といえよう。いずれにせよ、できれば盤面を『資本論』に広げ、より大局をにらんだ論戦を期待したい。なお小幡には、先に保留したように、解釈と批判の関係について、

もう少し述べたいことがあるという。

6 解釈と批判

山口氏の論考は「小幡道昭の宇野理論批判」と題されている。もし「宇野理論」が「純粹資本主義」の別称なら、好みの問題はともかく、私の「純粹資本主義批判」と同義になる。しかし、中味を読むと「宇野理論批判」はとも「宇野批判」の意味で、それが「誤読」「誤解釈」だということのようである。もしそうなら「解釈」とはなにか、「批判」とはなにか、に関して、山口氏と私の間には大きな隔たりがあり、厳しい論難の根もここにあるように思われる。

私が「解釈」の対象と考えているのは、あくまで、何か特定の事柄について書き記されたテキストである。もちろん、それを書いた著者はいるが、解釈の目的はそこに記された内容を明確すること以上でも以下でもない。その点では、著者も同じように、ある事柄をそのテキストを通して捉えようとしている点では、読み手と変わりない。書き終えたテキストに対しては、書き手も読み手と同じ側に肩を並べてたつ。読み手からみて、テキストの向こう側に、その著者が位置するのではない。著者もまた、テキストのこちら側にたち、一読者の資格で対等に自分のテキストを解釈するのである。

この点は、テキストを介さない対話形式の討論と決定的に異なる。対話では、個々の話し手が存在し、各自の考えている事柄が「言明」される。「言明」の内容はその場で問いただされ、ただちに答えなおされる。発言されたそれぞれの「ことば」の向こうには、顔のみえる話し手が控えており、「ことば」と話し手は一体のものとして現れる。こうした討論は閉じられた「座」を形成し、そこに同席した者の心中に一人ではたどりつけない深い洞察をうむ。しかし、そうした洞察は、討論の「座」を去るやいなや色褪せ、その含意を局外に伝えることは難しくなる。

テキストを介した議論ではこの関係が逆転する。特定の「座」を前提とした洞察にかわって、だれもがいつでも読めるテキストが主役となる。しかし、それと同時に言明内容と話し手の意図の直接的な一体性は消失する。それでも、しばしばテキストの著者に特別な地位が与えられるのは、対話におけるこの一体性が書かれたものの世界に無意識に投影されるためである。であればなおさら、学問的研究においては、“話された世界”と“書かれた世界”の関係は意識的に分かち必要がある。書かれたものの領域では「だれが書いたか」ではなく「何が書かれているか」が中心問題になる。たしかに、とりわけ抽象的な研究分野についていうと、新しい着想を生みだすうえで、一種の共同思考の「場」としての“話された世界”が重要な孵卵器の役割を果たすことは重々承知している。しかし、学問的研究はそれで完結するわけではない。その洞察は、だれでもいつでも読めるテキストに客観化されなくてはならない。この確定されたテキストのレベルにおいてなお、その向こうに著者の「真意」を必要以上にチラ

つかせるのは無分別というもの、いわんや著者が著者として現れて“本当はこう言いたかったのだ”といい、果ては“原著者は生前斯く語り”などと口碑にたより「誤解」「誤解釈」を難するのでは学問的な議論にならない。

このように考えてくると、では、だれでもいつでも読める客観的なテキストを共有しながら、なぜそこに「解釈」という作業が必要となるのか、があらためて問われる。それはおそらく、テキストが自然言語で記されており、それに特有な内容のブレが生じるということに深く関わる。自然言語で書かれた事柄には、数式で記された量関係や論理命題とは異なる独自の多義性を醸成する。たしかに自然言語で記されている、解釈を要するようなブレを含まない類の事象もある。「宇野弘蔵はマルクスが死んだ後に生まれた」という文章では、書かれている内容の解釈ではなく、それが事実と合致するかどうかの問題となる。だが、たとえば5頁に引用した文章で、商人資本や金貸資本による「破壊」と資本主義の「発生」の関係をめぐって“実演”してみせたように、二様、三様にとれる文章というものも存在する。

ここで注意しておくが、解釈の余地を生み出す自然言語の多義性は、必ずしもその欠陥ではない。“多義的”ということと“曖昧だ”ということは同義ではない。Aか、Bか、という、はっきりした極に分かちうる多義性は、すべてが灰色のままわからないという曖昧さと別で、もちろん意味があるのは前者のほうである。人間の社会的な現象の多くは、とりわけそうした諸現象を包括する全体像は、自然言語のこうした多義性を活かすことなしには語りえない複雑さを宿している。もちろん数式化によって多義性を排除できる事象は、自然言語にたよることなくモデル化すればよい。しかし、そうした事象は水面に浮いた泡のようなもので、曖昧さを退けてそれだけで掬い集めてみても、全体像は捉えられない。これまで引用し検討してきたテキストのように、自然言語を駆使してAともBとも現れる背景を分析する必要があるのである。どんなに厳密に規定したとしても、最後は“要するにこういうことだ”と記述するほかない世界は残る。“数式化できるまで語るな”といわれれば、黙して終わるほかないがないが、それでも“科学”の場を離れるや、どんなに厳密に語られた命題も自然言語による“世俗”の意義評価を免れえない。こうした世界をあらためて学問的に捉えかえすところに、だれにもいつでも読めるテキストを介した解釈の役割があるのである。

こうして、書き手がどのように厳密を期しても、湧出するテキストの多義性は、読み手による解釈を誘発する関係は自然言語の限界というより、むしろ新しい知見を社会的に形成してゆくための不可欠な契機をなす。とはいえ学問的な解釈に求められるのは、多義的なものを多義的なものとして漏れなく受け容れることではなく、こうした多義性を整理し、その内容に統一性をあたえることである。それは一種の書き換えであり、解釈された内容は書き手の「真意」から切り離され、異なる読み方を含んだテキストとして一般化される。もとより書き換えと

いっても、それはテキストにないものを付加するものであってはならない。それは解釈をこえる。解釈は、逆にテキストの圧縮であり、一種の剪定である。基本的に枝葉を切り落として、何が幹かを示すものでなければならない。ここには、読み手による判断の余地があるが、枝を切る前に幹を切るような、明らかに不適切な解釈もありうる。

こうした解釈を通じて、テキストに書かれている内容は命題ないしテーゼに確定される。学問的研究では解釈の範囲も、単にテキストを整理し、異なる読み方を併記するだけではなく、さらに踏みこんで読み手の責任において命題のかたちに言い切る必要がある。この命題化によって、その書かれた内容の真偽あるいは適否の判断が可能になり、どこをどう改めたらよいか明確にできるからである。解釈に続くこの作業が「批判」である。解釈はそれ自体が目的ではなく、批判のための作業であり、そのためには圧縮と一義化が不可欠なのである。むろん、どこまでが解釈でどこからが批判なのか、機械的に切断することはできない。いわばどういうかたちに剪定するかの判断は、同時に事柄はどう描いたらよいかという批判と裏腹にあり、その意味で批判的解釈といってもよい。ただ私自身は、心構えとして、両者を意識的に区別するよう努めてきたように思う。以上、山口氏が繰り返す「誤解」「誤解釈」という論難に対して、テキストの解釈と批判の関係について私の考え方を述べたまでである。

参考文献

- [1] 伊藤誠『逆流する資本主義』東洋経済新報社、1990年
- [2] 宇野弘蔵『「資本論」と社会主義』岩波書店、1958年
- [3] 宇野弘蔵『経済学方法論』東京大学出版会、1962年
- [4] 宇野弘蔵『経済原論』岩波書店、1964年
- [5] 宇野弘蔵『社会科学の根本問題』青木書店、1966年
- [6] 宇野弘蔵『経済学を語る』東京大学出版会、1967年
- [7] 宇野弘蔵『経済政策論 改訂版』弘文堂、1971年
- [8] 宇野弘蔵「インタビュー：宇野経済学 — その切り開いた道」『情況』1971年5月
- [9] 宇野弘蔵『経済学の効用』東京大学出版会、1972年
- [10] 小幡道昭「原理論における外的条件の処理方法 — 山口重克「段階論の論理的必然性」によせて —」『経済学論集』（東京大学）65-2、1999年7月
- [11] 小幡道昭「資本主義の不連続な変化 — 宇野弘蔵の唯物史観によせて —」『経済学論集』（東京大学）66-2、2000年7月
- [12] 小幡道昭「原理論の適用方法と展開方法」『経済学論集』（東京大学）67-3、2001年10月
- [13] 小幡道昭「純粋資本主義批判 — 宇野弘蔵没後30年に寄せて —」『経済学論集』（東京大学）74-1、2008年4月

- [14] 山口重克「段階論の論理的必然性 — 原理論におけるいくつかのブラック・ボックス」(山口重克編著『市場システムの理論 — 市場と非市場 —』御茶の水書房、1992年)
- [15] 山口重克「中間理論としての類型論」『政経論叢』(国士館大学) 112、2000年6月
- [16] 山口重克「中間理論としての類型論 (2)」『政経論叢』(国士館大学) 114、2000年12月
- [17] 山口重克「外的諸条件の構造化と類型論の方法」『政経論叢』(国士館大学) 115、2001年3月
- [18] 山口重克『類型論の諸問題』御茶の水書房、2006年
- [19] 山口重克「小幡道昭の宇野理論批判」櫻井毅・山口重克・柴垣和夫・伊藤誠編著『宇野理論の現在と争点』社会評論社、2010年、所収